

『念仏思想の比較宗教的考察』コメント（10分）

【イスラームにおけるズィクル】

人間の声を使った瞑想法という点で、イスラームの神秘主義におけるズィクルと仏教における念仏は共通すると考えられます。ただしズィクルについては、後半で佐野先生のご講演で詳しくお話しがあるため、ここでは簡単な言及にとどめます¹。

【サラート（礼拝）について】

また、念仏を宗教現象の一つである祈りとして位置付けることも可能だと思います。この観点からイスラームと仏教を比較するならば、まずはサラートを挙げるができると思います。サラートとは、イスラームの五行（イスラム教徒に課せられた義務としての信仰行為）の二番目の義務として課せられている礼拝です。スンナ派では1日に5回、シーア派では1日に3回の礼拝が義務付けられています。礼拝には、クルアーンの朗読や、神の賞賛（タクビール）などが含まれます。

タクビールでは、「アッラーフ・アクバル」（神は偉大なり）と唱えます。ムスリムは礼拝のたびにこの言葉を唱念することによって、アッラーの創造力や支配力、および無力な自己の存在を認識し、アッラーへの信仰を確信するといわれています。

【ドゥアーについて】

イスラームにおける祈りは、サラートの他にも、ドゥアーがあります。ドゥアーは祈願や祈りという意味であり、イバーダートに位置付けられます。イバーダートとは、宗教儀礼のことをいいます。ドゥアーはサラートのように定められた礼拝ではなく、定式をもたず、個人の自由に任されている祈りを指します。ドゥアーは、アラビア語で唱えなければならないサラートとは異なり、いずれの言語で祈ってもよいことになっています。

イランの代表的ウラマーであるマカーレム・シーラーズィー師は、ドゥアーとニヤイー

¹ イスラームにおけるズィクルは、想起、階層の意味で、イスラームの信仰実践においては、「おお、信ずる者よ、不断のズィクルをもって神を想起せよ」というコーラン 33 章 41 節のようなクルアーン中の命令に沿った神を想起することを意味します。

ズィクルは神秘主義的な実践にあたっては、通常の想起行動だけでなく、想起行為に含まれる連祷（れんとう）や、祈禱をも示します。それは個人的な実践行為ではありますが、集団的実践に対してもこの語は用いられます。ただし、その固有の定式や祈禱はタリカによって想定されており、それが集団の特徴となっています。スーフィー教団はそれぞれが、教団の通常のズィクル集会や成員たちの個人的なズィクルのための他とは異なる詩句や祈禱文をもっています。

エシュ（イランの公用語ペルシア語ではドゥアーはニヤーイエシュとも言われる）は、イスラームの教えにおいて特別な位置を占めていると述べています。ハディース（預言者ムハンマドの言行録）では、祈りは信者の武器、宗教の天幕の柱、天と地の光として言及されてきたことに触れた上で、ドゥアーは人間の能力を高めるといいます。なぜならドゥアーによって人間は神のもとに行き、こころとたましいをアッラーの知識（マアリファ）の光で清め、自らの罪を悔い改めるからだとかマカーレム・シーラーズィー師はいいます。マカーレム・シーラーズィー師によれば悔い改めは、祈りを受け入れるための条件の一つであり、そうすることで神の恩寵に対するより多くの能力が得られるといっています。

【20世紀イランの知識人における祈りの解釈】

このようなイスラームにおける祈りの意味を、西洋文化理解を通じて深めたイランの知識人とその思想を紹介します。アリー・シャリーアティー（1933–1977）は、20世紀イランを代表する知識人の一人であり、イラン革命の立役者として一躍脚光を浴びた人物でした。彼は膨大な数の著作を遺していますが、そのなかに『祈り』（*Niyāyesh*）という文学作品があります。

この作品は、フランスの生理学者、外科医、思想家として知られるアレクシス・カレル（1873–1944）の晩年の論考『祈り』（1944）に影響を受けて書かれました。1960年代フランスに留学していたシャリーアティーは、留学中に改めてカレルの『祈り』を読み直し、翻訳に着手しました。そして帰国後はこの翻訳をもとに「祈りの哲学」（*Farsafe-ye niyāyesh*）という講演を行なったほか、自ら『祈り』という文学作品を執筆しました。シャリーアティーがカレルの『祈り』にいかに関与していることがわかれると思います。

カレルの『祈り』の翻訳を通じて、シャリーアティーはイスラーム、特にシーア派における祈りの特徴と重要性を改めて認識しました。1970年に行われた講演「祈りの哲学」でシャリーアティーは、シーア派の祈りの特徴として①「言葉の雄弁さ」、②「言葉、単語、文、テキスト全体の音楽」、③「思考的要素」④「政治的・社会的要素」の4つを挙げています。シャリーアティーが①「言葉の雄弁さ」と②「言葉、単語、文、テキスト全体の音楽」を挙げた背景には、イスラームにおいて祈りが主に声に出して唱えられることがあると考えられます。シャリーアティーが③の「思考的要素」と④「政治的・社会的要素」を挙げた理由としては、イスラームが政治と関わらざるを得なかった歴史的な背景を指摘することができます。

シャリーアティーは講演のなかで、自らが挙げたシーア派の祈りの特徴が最もよく現れた例として、シーア派の第4代イマームである、アリー・イブン・フサイン・ザイヌルアービディーン（658–713）による祈りの書『礼拝者の経典』（*al-Ṣahīfah al-Sajjādīyah*）を挙げています[Sharī'atī 1373Kh/1994, 70]。『礼拝者の経典』は、ザイヌルアービディーンによって編纂された、シーア派の祈文集です。そこには預言者やシーア派のイマームたちが、いかなる環境で、どのように祈っていたのかが記されています。この『礼拝者の経典』は

アラビア語で書かれましたが、古くからペルシア語に翻訳がされてきました。

シャリーアティーはカレルの『祈り』の翻訳を通じて理解したシーア派の祈りのテキストの特徴を、自らの『祈り』に反映しました。シャリーアティーの『祈り』は、2部構成になっています。前半は神に対する祈りの内容であり、後半の内容は神の他にも、イマーム・アリーやザイナブといった、シーア派上重要な歴史上の人物にも呼びかけるものとなっています。

シャリーアティーの『祈り』には、シーア派というイスラムの少数派が、これまで辿ってきた迫害の歴史やそれを思い起こすことでシーア派信徒たちに宿る精神的な痛みも表現されています。つまり、シーア派信徒が味わってきた辛い経験を思い起こし共有する役割も、シャリーアティーの『祈り』は持っていることとなります。

例として『祈り』の後半部における、シャリーアティーがシーア派の初代イマーム・アリーに祈りを捧げている部分を引用してみたいと思います。

アリーよ、

嗚呼、獅子なるアリーよ！

神なる人間、民衆のための人間、

愛と剣の神！

私たちは「あなたを理解する」力を失ってしまった。

あなたへの理解は、私たちの頭から奪われてしまったのだ。しかし、私たちは「あなたへの愛」を、運命に抗いながらも、自身の良心の奥深くで、自身の心の奥深くで、たいまつのように守りつづけている。

あなたは、あなたの愛する人々を卑劣のなかに放り込むとでもいうのか？

あなたは、ユダヤ人女性にたいする迫害に——彼女はあなたの統治下生きていた——耐えることができなかった。現在の、ユダヤ人の統治下で生きる、イスラム教徒を見よ。

アリーよ、彼らの身に何が起きているのか見てくれ！

嗚呼、その強い拳を持つ者よ——「その拳は圧政と暴君に勝る」——

もう一度打ってくれ[Sharī‘atī 1373Kh/1994, 119]！

シャリーアティーはイマーム・アリーのことを獅子や剣に喩えています。これは、イマーム・アリーが比類なき戦士として知られており、獅子との類比で表現されてきたこと由来します。また、イマーム・アリーは名剣ズルフィカールで戦っていたとされています。ここ述べられている「剣」とはズルフィカールのことで間違い無いでしょう。

「私たちは『あなたを理解する』力を失ってしまった。あなたへの理解は、私たちの頭から奪われてしまったのだ。」、「私たちは「あなたへの愛」を、運命に抗いながらも、

自身の良心の奥深くで、自身の心の奥深くで、たいまつのように守りつづけている。」という部分は、次のようなシーア派の状況を指していると解釈できます。それは、預言者ムハンマドの死後、イマーム・アリーこそがムハンマドの後継者であるという主張が認められず、イスラムの中でそれは少数派となり、その後、シーア派が、自らの信仰を公にすることができずにいた状況です。

またシャリーアティーは、イマーム・アリーが一人のユダヤ人女性に心を痛めた出来事も挙げています。これは、おそらく『雄弁の道』 (*Nahj al-Balāgha*) という、シーア派ハディースの中でも最も重要であり、アリーの説教、書簡、箴言が収録された書なかの「第 27 の説教」に登場する、非ムスリム女性を指していると考えられます。「第 27 の説教」では、イマーム・アリーが、ムスリムに虐げられたムスリム女性と非ムスリム女性に強い懸念を抱いていたことが記述されています。異教徒にたいして心を痛めるほどに、イマーム・アリーは慈悲深い人物であったことをシャリーアティーは示したかったのではないかと思われます。なお、これに続く、「現在の、ユダヤ人の統治下で生きる、イスラム教徒を見よ。アリーよ、彼らの身に何が起きているのか見てくれ！」と言うのは、1970 年代のパレスチナ問題を指していると考えられます。

このように、シャリーアティーの『祈り』には、雄弁かつリズムミカルな言葉にのせて、直接神やイマーム・アリーに語りかけ、彼らとのつながりを通じて、真にイマーム・アリーを理解し、彼に従おうとする姿勢が表れています。シャリーアティーは祈りを通じて、自らの信仰を改めて認識し、その信仰心を高め、その結果としてシーア派信徒たちの社会の結束が強まっていくことを目指していたと考えられます。

以上、私からは念仏を祈りの一つととらえ、その観点から、サラートとドゥアーというイスラームにおける祈りについてお話ししました。私からのコメントは以上になります。ありがとうございました。